

乗車命令がなく、連日穀物の積み替え作業に出され、六月末になって各収容所より集合した二千人が乗車すると、発車した。車内ではチタを過ぎるまでは右に行けば満州里、ハルビン、牡丹江、ウラジオストク、直進すればどこへ着くかわからないなどの話題でしたが、だんだんとタモイの話題はなくなり、十日くらいして雨の降る夕刻、急に下車命令で幕舎に入れられ、その日から共產教育が始まりました。

三日目の早朝、港であることを知り、日本の船が入港しており、初めて帰国できることを思い、ともに泣いた。

乗船すると船員がバット二個ずつくれた、早速一本吸い日本の味を思い出している間に、船は静かに出航していた。日本に近づくにつれ、湾の両側から日の丸の旗を振って迎えてくれ、同胞のありがたさを感じた。夕刻五時までに舞鶴港に入港できれば本日中に上陸できる知らせがあったときは、十八日夕刻であった。間に合った。

下船と同時に検疫のためDDTの白い粉を吹きかけ

られ消毒とわかった。翌日より休養と種々の調査があり、米軍の軍属からソ連のことについて聞き取り調査があった。

落ちつくにつれ妻と子供四人は新京より無事引き揚げていくか、東京の両親はどうしておるかと考えても、解決できないことばかりで、七月二十二日朝を迎え、東舞鶴駅より妻の家に向かった。

夜盲症

岩手県 岩館 弘 一

昭和二十二年八月十三日、八面通の西方、自興屯においてソ連軍を迎撃し、陣地を死守せよとの命令が下る。

午前九時より敵戦車、野砲の砲撃と歩兵の敵前突入直前の戦闘により、我が中隊は多数の死傷者を出し、また弾薬の欠乏による戦闘不能の状態となった。中隊は生存者の先任軍曹の斎藤軍曹指揮のもと牡丹江を目

指し撤退したが、牡丹江はソ連軍に制圧されていた。そのため横道河子西方の大密林の山中を横断して、九月一日、山中に進出し、九月二日、新安鎮部落において終戦を知り、武装解除を受けた。

それから新安鎮―蘭崗―寧安―牡丹江と転々と移動させられ、だれもない野原で裸にされ、所持品の検査を受け、特に万年筆、腕時計、財布、金員まで強奪された。牡丹江において作業大隊の編成が行われ、私の小隊では、私ともう一人の下士官下村義人君が別の作業大隊に編入され、今まで一緒に行動した隊員とは以後一緒にすることができなかった。

十月十六日、東京に帰すというソ連の指揮官の言葉を信用し貨車に乗り込んだ。二段に仕切った車中より外界を見ることができないが、ウラジオストクまでと、車中の者は我慢をしようと話合った。

貨車が停止した駅は、私が渡満し満州の大地に一步踏んだのがこの綏芬河の駅である。食事支給と排便のため戸が開けられたが、街並みは余り破壊されていない、いよいよ国境のトンネルを通過し、翌日朝、列車

が北上しているのがほんのわずかなすき間よりはっきりわかった。車中の者は異口同音にだまされた、悔しいと叫んだが、どうすることもできない。

列車が進むにつれ積雪が多くなった。ハバロフスクを過ぎて三日ほどである小さな駅に停車し下車を命じられる。そこからシートを張ったトラックに乗り換え、翌朝九時ごろか、収容所らしい建物が五棟と倉庫のような建物が六棟くらいあり、その収容所より五十メートルくらい離れたところに川があり、水量が多いようだった。

早速小隊別に収容所の建物の清掃、整備の作業を行い、三日くらいで大分整理ができた。作業用の資材は、鋸、タポールだけしかないので、毎日まき切り作業が始まった。朝昼は雑穀のおかゆのような食事で、夕食は黒パン三百グラムにスूप少々である。

雪も消えた五月末より鉄道の路盤工事が始まる。収容所より約百メートルくらいのところ、南北にバム鉄道があり、路盤工事が途中で休んだのか、低い路盤であった。この路盤を高くするための土砂の採掘作業で

ある。この工事は一か年半くらいで終了、怪我人もなく過したが、オーカーになった戦友もたくさんおり、入院し、その人たちの補充に他の収容所より移動してきた戦友もたくさんいた。

昭和二十二年の一月ころ、ヤクドニヤの収容所に移動し、収容所より南へ四キロの地点で路盤の左右に側溝掘りの作業となった。片道一時間の路盤を往復し、爆薬を使用したりして酷寒時の作業としては順調に工事が進んだ。このころは我々捕虜の体力は衰えてきた。

この作業に従事してから約十日くらい経て、夕方帰路の際、私の目がなんとなくかすんでいるようだった。隊伍を組んでる小隊より私がおくれていた。各人とも寒さのため防寒帽の耳覆いをおろして下の方だけ見て歩くので、私の遅れているのをだれ一人わからなかったのだ。私の目は遠くに小隊のかたまりがかすかに見える。そして私が左右の路盤下に落ちたり、またはい上がったりにするうちに小隊は相当進んだようだ。このままでは私は収容所に帰れないので、オーイーだれか来てくれ、助けてくれと大声を出して叫んだ。叫んで

いるうちにだれかが呼んでるようだ。そして目の前に戦友が四人私を両側より支え、おい岩館大丈夫か、どこが悪いんだ、どこが痛えんだと言言葉に、私はただ涙が出て話をするのができなかった。ようやく気持ち落ち着いたので、目が見えなくなつて路盤より右に転げ落ちたり左に落ちたり、その都度はい上がり、このままでは死んでしまうと思つたので助けを求めたことを話した。小隊が止まって待っていたので、小隊長に事情を説明し、また小隊の諸君にご迷惑をかけたことについて謝つた。無事収容所に戻つたが、当日監視兵がついていたら銃殺されたかしくなかつた。戦友に両脇を支えられ宿舎に入るが、人の顔が見えず、ただランプの明るさだけがぼんやりとしか見えない。食事受領にもまた便所に行くにも戦友が一人付いてくれなければ全くだうすることもできなかった。宿舎内で食事を受領するために戦友に支えられても、だれかにぶつかつて怒鳴られたりして宿舎の戦友諸氏に大変なご迷惑をかけた。翌日日本の軍医に診断をしてもらつた結果、夜盲症でありビタミンAが不足しているため

で、脂肪を必要とするから炊事の方に聞いてみるのとことであつたが、炊事にも全然ないとのこと、二、三日中に脂肪をみつけると言われた。

翌日は、気温が下がり寒さが厳しいので作業中止となり、午後より炊事周囲の整理の使役に出された。炊事の裏側には我々のスーブの材料となつた豚、牛、羊の頭蓋骨がたくさんあり、何気なく大きな牛の頭蓋骨の上顎をタボールでたたいて壊すと、鉛色でバナナくらいの脂肪のようなものが出てきた。一緒に使役に行つた戦友に見てもらつたところ、脂肪だと言つて頭蓋骨を五個くらいに割つて、飯盒の代用になっている缶詰の空き缶に入れ持ち帰り、夕食の際、戦友がスーブで溶かして見ると、ギラギラとした脂肪が浮いていると言つて、私と一緒に飲んだ。その翌日軍医に報告すると、毎日食事の際にスーブに入れて飲むようにと言われた。一週間ばかり服用しているうちに目は夜間でも見えるようになった。

あの路盤工事のときもし戦友が戻つて助けてくれなければ、また時間的にもおそかつたらシベリアの寒さ

に負け死んでしまつたかも知れない。体力も入ソの際より弱り昭和二十三年の五月、下痢とカゼに倒れ、入院を約一か月して病院の生活を送つた。

退院後は軽作業をするようになり、昭和二十三年七月タモイ要員となり、八月中旬にナホトカへ送られ、同年八月二十日、栄豊丸に乗船して無事舞鶴に上陸した。その日は八月二十四日であつた。

シベリア抑留生活から

岩手県 岩 功

シベリアの酷寒は予想外に厳しい。ノルマを要求されての強制労働をしいられ、辛うじて越冬でき昭和二十一年の春を迎えた。

私の属するロストフカ収容所でも、例によつてソ連軍の身体検査（裸体にし尻の肉づき等も大きな判定基準）で三大隊に入った。一、二大隊が健康者で、割り当てられる作業も当然重労働作業が多く、第四大隊は